

"2nd International scientific-practice conference 'Swimming. Researches, Training, Hydorrehabilitation' International Seminar on swimming" に参加して (at St.-Petersburg, Russia)

下山 好充*・菅野 篤子**

Report on "2nd International scientific-practice conference 'Swimming. Researches, Training, Hydorrehabilitation' International Seminar on swimming."

SHIMOYAMA Yoshimitsu*, SUGANO Atsuko**

【はじめに】

"2nd International scientific-practice conference 'Swimming. Researches, Training, Hydorrehabilitation' International Seminar on swimming"がロシア連邦のサンクト・ペテルブルク (St.-Petersburg) にて 2003 年 9 月 9 日～11 日の 3 日間にわたり開催された。学会自体まだ 2 回目ということもあり、開催国ロシアをはじめヨーロッパ各国の研究者や水泳の指導者が主に参加していた。今回、我々がロシアでの本学会に参加した目的は、「国際学会での発表」、「ロシアの水泳に関する情報収集」、「海外の研究者との情報交換および交流」、「ロシアの研究施設およびプール施設の見学」の 4 つであった。

ロシアは毎年必ず世界トップクラスの水泳選手を輩出しており、かつ世界記録保持者も有している国で非常に競技レベルが高い国の 1 つである。また、水泳の研究分野においてもトレーニング現場と密着した非常に有名な研究者が存在している。それらの理由から一度自分の目でロシアの水泳事情を確かめたいという強い思いがあった。そういったこともあり今回、筑波大学からは、野村武男教授を始めとし、我々と水泳研究室の大学院生 2 名が参加した。

本学会が行われたサンクト・ペテルブルクはロシア第 2 の都市と言われ、ソビエト連邦時代に

レーニンの名を取って「レニングラード」と呼ばれていた都市であった。また、昨年ちょうど 300 年祭を迎え、それに伴って教会や聖堂、モスク、橋などが改修されたらしく、非常にきれいな町という印象を受けた (写真 1)。



写真 1 : St.-Petersburg の町並み

【学会の概要】

今回の学会の参加者のうち日本人は我々 5 人のみで、それ以外はロシアとヨーロッパ各国の人々だった。また、参加者の約半分が大学や研究所に勤務する研究者、そして残りの約半分が現場のコーチであり、中には将来、コーチや研究者を目指している現役の大学生の選手もいた。このよう

* 筑波大学体育センター Sports and Physical Education Center, Univ. of TSUKUBA

** 北海道浅井学園大学人間総合学科スポーツ科学系 Sports science program Department of Liberal studies, Hokkaido Asaigakuen College

なことから、本学会で使用された言語は英語もしくはロシア語で、イヤホンを通して英語とロシア語の同時翻訳システムが採用されていた(写真2)。また、現場のコーチが実践的な事例を発表した演題もあり、非常に現場に則した発表や質疑応答が多かったように感じる。ただ、英語とロシア語の同時通訳システムを使用していたため、ロシア語での発表や質疑応答のやりとりを、同時通訳された英語でイヤホンから聞き取るのは非常に苦労した。



写真2：露・英語同時通訳用イヤホン

学会3日間を通して、競泳に関する発表だけでなく、トライアスロンやシンクロナイズドスイミング、フィンスイミングなど幅広い発表が行われ、さらに、最近日本でも非常に多くなった水中運動やプールを利用したりハビリテーションに関する発表が盛んに行われていたのには驚いた。

ここで、簡単に1日ごとの学会内容を紹介する。

・1日目〔9月9日〕

初日の午前中にロシアの水泳に関する研究者の中で最も有名な Dr. Kolmogorov による「水泳中の推進効率と泳パワー」に関する基調講演があった。彼は世界中の水泳の研究者で知らない人はいないほど有名かつ優秀な研究者で、水泳中のアクティブドラッグ(動的な抵抗)を簡易的に推定する装置および方法論を考えだした研究者である。また、彼は野村教授の古くからの友人で、数年前に講演のため日本に招待したことがあり、久しぶりの再会となった。また、彼は50m自由形の現世界記録保持者 Popov 選手(ロシア)を始めとするロシアのトップ選手のテクニカルアドバイザーをつとめ、

自分のアクティブドラッグ装置を用いて継続的に泳ぎの技術を評価している。

また、午後には野村教授が座長をつとめ、フランスの Dr. Pelayo による「有酸素性持久トレーニングとストローク特性の関連性」を始めとした競泳に関する内容を中心に発表が行われた。Dr. Pelayo は2002年に行われた4年に1度開催される水泳の最も規模の大きい国際学会(IXth World Symposium Biomechanics and Medicine in Swimming)においてシンポジストをつとめ、そして私の研究テーマに深く関連した研究を行なっている研究者であった。そのため、今回の学会でいろいろなディスカッションができ、更に多くの示唆をいただくことができ、非常に深い交流ができた(写真3)。



写真3：Dr. Pelayo とのディスカッション

1日目の発表終了後、控室にて簡単なウエルカムパーティーが催された(写真4)。はるばる日本から来た我々にみな非常に興味関心をいただき、日本の水泳事情などを色々と聞かれた。特に筑波大学が研究分野だけでなく競技力向上にも力を注ぎ、毎年日本代表選手を輩出していることにみんな驚いていた。

・2日目〔9月10日〕

2日目の午後には下山の発表を控えていた。今回が3回目の国際学会での発表で、且つポスター発表であったため、実は今までに比べたらそれほど緊張もしないと思っていた。しかし、当日の朝、現場のコーチもいるのでポスター発表も5~8分程度説明をするよう事務局から指示を受け、非常に困惑した。発表の練習など一度もしていないの

に……。朝から急に緊張して午前中はイヤホンから入ってくる英語がほとんど聞き取れなかったのを覚えている。菅野はランチタイムの後すぐに "Muscular activation during land and water exercises for low back pain" というタイトルで口頭発表を行ない、水中リハビリテーションを専門とする Dr. Mossounov (ロシア) に多くの示唆を受けることができた (写真 5)。



写真 4 : ウェルカムパーティーにて



写真 5 : 菅野の口頭発表

そして夕方、下山は緊張しながら "The effect of swimming style on blood lactate response to interval swimming in highly trained swimmers" というタイトルでポスター発表を行なった (写真 6)。前述した Dr. Pelayo や Dr. Kolmogorov、そして本学会の大会会長である Dr. Petriaev を始め、多くの研究者やコーチに興味を持ってもらい多くの意見や示唆を聞くことができた。また、ロシア人のコーチからの質問に対しては、専門用語が多かったため、同

時通訳者がいたにも関わらず、Dr. Kolmogorov が代わりに通訳するというハプニングも発生した。

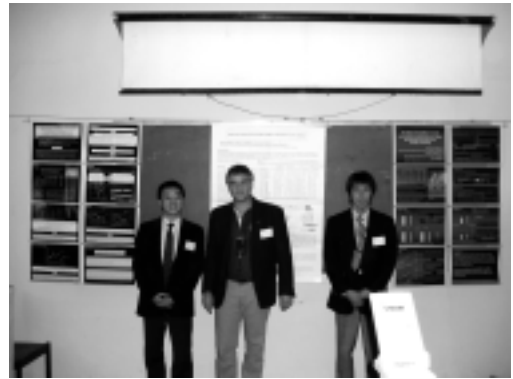


写真 6 : ポスター発表

(左から下山、フランスの Dr. Sydney、大学院の富川)

下山の発表が無事終わったあと、野村教授、Dr. Pelayo、Dr. Petriaev、ロシア水泳連盟の関係者で、ジュニア水泳選手のタレント発掘や指導法の在り方についてのシンポジウムが行われた (写真 7)。そして、フロアにいたロシアのベテランコーチを含めてかなり白熱した議論が展開された。



写真 7 : シンポジウム

この日の学会終了後、発表の終えた日本人、フランス人、ドイツ人、ポーランド人のメンバーと一緒に食事をし、そして、ウォッカを飲みながら水泳の研究を始め、世界選手権、1 年後に控えていたアテネオリンピックなどの話題で盛り上がった (写真 8)。



写真 8：海外の研究者たちと夜の交流

・3日目〔9月11日〕

3日目の午前中は、水中リハビリテーションに関する発表がほとんどであった。障害児にどのようなリハビリテーションを行ない、どのように回復していったかなど、Dr. Mossounov が映像を使って紹介するような発表も見受けられた。

午後、閉会式が行なわれ、そのまま学会が企画したボートツアーとバスツアーに参加した。このころには各国の研究者や学会に参加していたコーチや現役選手ともかなり親しくなり多くのコミュニケーションを取ることができた。参加人数が500～1000人を超えるような大規模な学会と比較して、今回のような小規模の学会のほうが、海外の研究者と深いコミュニケーションが取れて非常に充実していたような気がした（写真9）。



写真 9：学会企画のツアーにて（ペテルゴフ大離宮）

・学会終了後〔9月12～13日〕

学会が終了した後、我々は、Dr. Mossounov の勤務する研究所とプールへ行き、水中リハビリテーションの施設を見学させてもらい、若い指導者を

交えながら水泳に関する多くのディスカッションを行なった。

【おわりに】

ロシアでの学会開催ということで、出発前ピザがぎりぎりまでおりなかったり、モスクワ空港内の乗り継ぎタクシーでばられたり、地下鉄で写真をとって罰金を取られるなど色々とトラブルはあったが、我々にとっての国際学会3度目の発表をなんとか遂げることができ、そして最初に掲げた4つの目標もほとんど達成することができた。前述したように今回は小規模な学会であったが、そのために海外の著名な研究者と深いコミュニケーションを取ることができ、本当に貴重な時間を過ごすことができた。今回の貴重な経験を生かし、これからも、益々研究活動に励み、今後も国際学会にチャレンジしていきたいと思う。

付記)この学会は、平成15年度筑波大学栗原基金からの助成を受け参加した。